青梅市文化財ニュース

第２４９号

平成２０年７月１５日

発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684　℡0428-23-6859）

御嶽神社とおいぬさま

御嶽神社の御祭神はと聞かれて、答えられる人はそう多くないでしょうが、御嶽神社の「おいぬさま」はとてもよく知られています。神社のご祭神は櫛真智命・大己貴命・少彦名命・廣國押武金日命で、五穀豊穣や家内安全・商売繁昌のご利益があります。また、奥宮には日本武尊をお祀りする男具那社が鎮座します。おいぬさまは、正式には大口真神といい、御嶽神社の本殿裏手の御岳山頂にお祀りされ、人々を様々な災いから守ってくださるといわれます。おいぬさまは本来御眷属(神に従うもの)でしたが、やがて社が建てられ、神様として崇められるようになり、さらには御嶽の神様がおいぬさまに姿を変えて、人々を守ってくださるといった信仰に発展していきます。

このおいぬさまが、様々な災いから人々を守るいわれとなった話は、日本書紀の第 12 代景行天皇の日本武尊東征のところに出てきます。日本武尊が東国を平定し、信濃の山中において

> 山神、王を苦しめむとして、白鹿に化りて王前に立てり。王、異みたまひて、一箇の蒜を以て白鹿に彈きかけたまふ。則ち眼に中りて殺しつ。爰に王、忽に道を失ひて出でまさむ所を知らず。時に白狗、自ら來りて王を導きまつる状有り。狗に隨ひて行でて、美濃に出づることを得つ。(『神典』大倉精神文化研究所より)

さらに、元和八年(1622)といわれている御嶽山社頭来由記には奥宮にて

> 然るに深山に邪神あり、大白鹿と化して道路を塞きて尊の駕をこばむ。尊太占に因て其山鬼なる事を知召て、山蒜を株て大鹿の面に弾き給ふに、あやまたす鹿の眼に中て鹿斃る時に、山谷明動して雲霧起りて濃々たり。されは尊群臣と共に路を失して踟〇(足へんに厨)し給ふに、忽然として一ツの白狼顕れ前駆に先立て軍士を導の形をなせり。尊是に随ひ給ふて西北の地に出、大に征し給ふに、賊民或は亡ひ或ハ随ひ奉りて終に其地を得給ふ。尊白狼に告たまハく汝本陣に帰り至りて火災盗難を防き守護すべしと、白狼諸するの相をなし喜声を

（裏面に続く）

なして御嶽山の方に向て去りぬ。是火難盗難退除の守護神たる由縁なり。(『武州御嶽山史の研究』齋藤典男著より)

おおかみを神と崇める話は関東甲信越に多く残っており、これが日本書紀に採用されたのか、日本書紀の影響でこの話が生まれたのかは定かでありませんが、いずれにせよ、この逸話が由来となり、おいぬさまが人々や家を守護する信仰が生まれたようです。

関東一円に広がる、御嶽神社を信仰する講といわれる家々には、神社のお札とあわせて、大口真神の門札(家の入り口などに貼るお札)が、頒布されています。神職にとって、この大口真神信仰は御祭神と同様に大変重要で、御嶽信仰の一端を担っています。このお札は現在も江戸時代の版木からおこした、100 年以上変わらないお札です。

おおかみのお札は、秩父の三峯神社や宝登山神社などにもありますが、これらのお札が写実的なおおかみの姿をしているのに対し、御嶽のおいぬさまは象徴化した図柄です。文化 5 年(1808)に奉納された本殿両脇の青銅製おおかみは、すでに今のお札の姿に似ています。

また、大口真神の社殿創立は、「御神狗」と書かれた安政 5 年(1858)の扁額があることから、この時といわれます。それまでは社殿はなく、本社北側の尾根を 200mほど下ったところに石の台(高坏(たかつき))があり、そこに神饌(しんせん)(神様のお食事)をあげていたようです。ここへの一般の方の立ち入りは禁止されていますが、現在では「石のお宮」といわれ、大祭の時にはお餅があげられます。現在の社殿は昭和 14 年に建て直したもので、流造瓦棒銅板葺に見事な彫刻が施してあり、大口真神が神社にとってとても重要であることがわかります。

御嶽神社には社家が 32 軒あり、それぞれの家に御嶽の神様がお祀りされています。この家々の神殿を「内神殿」と呼び、毎月 15 日頃の夕刻、順番で決まった家に神職が集まり、内神殿の御祈祷を行います。御嶽の神様を祭るこの行事をなぜか「おいぬ講」と呼び、家によってはその日に、石のお宮に赤飯をあげます。ここにも、御嶽の神様とおいぬさまが、同一の神格をもつ一端がみえ、神職にとっても、それが当たり前になっていることがわかります。

(文責　須崎　直洋)